

【基調講演】学業不振学生 指導上の諸問題

一関工業高等専門学校

梅野善雄

1 はじめに

この場に立ってみて、「大変なことになってしまったなあ」というのが今の心境です。それというのも、あの小冊子を皆さんにお配りしてしまったことにあるわけですし、こういうことになるのなら書庫にでもしまっておくのであったと後悔致しております。学生主事の平山先生からは、あの中に書いた事と同じ内容で良いと言われたのですが、この日が近づくにつれて大変心配になってきました。本当に同じ内容で良いのだろうか。わざわざ夏休み中の貴重な時間をさいて来られる先生方に対して大変失礼なことになるのではないかとも思うようになりました。

しかし一体自分に何が話せるかを考えてみますと、これまでやってきたことはアンケート調査をやってそれを単にまとめてきただけに過ぎないわけですし、結局はそれに関する事しか話す内容はないわけでありまして。したがってやはり今までと同じ内容でしか話せないということで、その点は御了解頂きたいと思っております。

ではどんな内容にするかということで全体の構想を考えてみますと、この会は厚生補導研究会なわけですし、当然厚生補導と関連づけなければならないのだろうと思うわけですが、しかしどう考えてもあまり結び付いてこないわけですね。それでは全体の構想が立たないわけですし大変困るわけですが、基本に帰る意味でこの会の実施要項を改めてよく見てみますと、「教育指導上の諸問題と、厚生補導との関連について認識を深めるため、教職員が一同に会して総合的な見地から意見交換や協議討議を行う」というようなことが書いてあるわけですね。つまり厚生補導との関連については、この場で「協議討論される」ということなようなので、実は大変安心したわけですね。したがって私としては、単に「教育指導上の諸問題」について問題提起をすれば良いのだなあ、そのことと厚生補導との関連については皆さん方によって協議討論されるのだなあ、そのように理解したわけですね。

さて安心したところで、最初に全体の流れをお話しておきたいと思っております。これまでアンケート調査をやってきて感じることは、入学前にすでに問題のある者がかなりいるのではないかとということです。そこでまず、学生は高専を志望するにあたりどういうことを考えて入学してきたのかということからお話したいと思っております。そして次に、そのようにして入学した学生の意識は学年が上がるにつれどのように変化していくのか。特に、「学業不振学生」という演題ですから、成績下位の学生や意欲のない学生が何を感じ何を望んでいるのかということに触れたいと思っております。そして最後に、ではどういった指導をすべきなのかということで、指導上の問題点について触れてみたいと思っております。

利用する資料は本校学生に対して行ったアンケート調査で、昭和58年度から昭和63年度にかけて行ったものです。昭和58年度と昭和59年度のものは、本校の1年から5年までの全学年に対して行ったものです。また昭和60年度から昭和63年度にかけてのものは、昭和60年度の入学

生に対して彼らが4年になるまで、同じアンケート用紙で毎年同じ時期に継続的に調査したものです。ちょっと古い年度の資料で恐縮ですが、私の感じとしては全体の傾向はそれほど変わりはないのではないかと考えています。この中から先ほど述べたような方向のもので具合のいい部分を引用してお話させて頂きたいと思います。

それから私は今教務主事補なわけですが、そういう立場から見ると今回の演題は実は大変話ずらい演題なわけです。この会の結論が、これは教務の問題であるから教務委員会で考えてもらおう。そういうことになるのではないかと、内心大変心配しておるわけですが。この会の目的は、「意見交換や協議討論を行い、今後の学生の厚生補導に反映させる」ことにあるわけですので、念のため付け加えさせて頂きたいと思います。

2 高専志望時の意識

それでは本題に入らせて頂きたいと思います。まず学生は、高専に入学するにあたりどのようなことを考慮して入学しているのかということです。高専志望時の考慮項目については昭和58年度にかなり詳しく調査したので、おもにその年度の1年生におけるものをもとにお話します。

学生が考慮したと思われる項目を10項目ばかり用意して、各項目ごとに回答肢を「非常に考慮した」「かなり考慮した」「少し考慮した」「あまり考えなかった」の4段階で答えさせますと、最も良く考慮されたのはやはり「就職率がよい」ということです。96.0%の者が「考慮した」と答えています。特に62.7%の者は「非常に考慮した」と答えています。つぎに多いのが「工業技術者を養成する学校である」ということです。93.5%の者が考慮しています。これをみますと「就職率がよい」ということは、やはり本校にとっては重要なセールスポイントの一つになっていると思われまます。また「技術者養成」という本校の教育目的も十分考慮の上志願していると思われまます。

表1 高専志望時の考慮項目

考慮項目	あまり 考えない	少し 考慮した	かなり 考慮した	非常に 考慮した
就職率がよい	3.9	6.5	26.8	62.7
工業技術者を養成する学校	6.5	14.4	42.5	36.6
国立で設備が整っている	22.9	32.7	27.5	17.0
自分の能力適性に合う (以下略)	23.5	39.2	30.7	6.5

(昭和58年度第1学年)

これだけを見ると特に問題はないように思われまます、**「自分の能力適性に合っている」**ということまで考慮したかを見ると、この項目を考慮したのは76.5%。このうち**「非常に考慮した」**のは6.5%にしかすぎないということにして、逆に見ると約4分の1の学生は自分の適性に合うかどうかはあまり考慮しないで志願しているということになります。ともかくこうして学生は高専に入学するわけですが。彼らの友人の大多数は高校に進学するわけですので、その中で他と別の道を選択することはかなりの決断が必要だったのではないかと考えられます。

そこで一体誰の意志で高専に入学したのかを聞いてみますと、「いろいろ考えて自分から進んで」入学した者は 57.5 %、「親や先生に勧められて意欲的に」入学した者は 24.8 %ということでした。この回答は他の年度でもあまり変わらないようです。合わせますと約 8 割の学生はわりと積極的な気持ちで入学しているとみてよいのではないかと思います。

表 2 高専には誰の意志で入学したか

いろいろ考え自分から進んで	57.5	親や先生に勧められて意欲的に	24.8
親や先生に勧められて何となく	8.5	気は進まないが試験に合格したので	7.8

(昭和 58 年度第 1 学年)

ではつぎに、学生が本当に入学したかったのはどの学校であったのかをみてみますと、「高専の現在の学科」としたのは 37.3 %、「高専の他の学科」としたのは 20.3 %ということでした。つまり約 8 割は積極的な気持ちで入学してきたとはいっても、高専に入学したいと強く思って入学してきたのは合わせても 57.6 %にすぎないということです。他の学生は本当は高校に入学したかったということになります。

表 3 最も進学したいと思った学校

高専の現在の学科	37.3	高専の他の学科	20.3
高校（普通）	28.1	高校（工業・商業等）	13.7

(昭和 58 年度第 1 学年)

他の年度の 1 年生では、昭和 59 年度に「本当は高校の方に入学したかった」という項目に肯定的に回答した者は 28.0 %、昭和 60 年度に「高専よりも高校の方が良かったと思うことがある」に「そうである」と肯定的に回答した者は 60.0 %でした。設問の仕方が違うことにもよりますが、いずれにしろ調査の行われた 11 月に 1 年のかんりの者は「高校の方が良かった」という思いを持っていたのではないかと思います。

このように見てきますと、学生は高専がどのような学校であるかはよく理解の上、しかもわりと積極的な気持ちで入学してはいますが、では高専は本当に入学したい学校であったのかというと、必ずしもそうとは言い切れない。「本当は高校に入学したかった」という思いを持ちつつ高専に入学している者もかなりの数になるように思われます。

高専は「技術者教育」という一本道しかないわけでして、そのような学校でこのような目的意識の不明確な学生が多いことは大変問題があるわけでありますが、この割合はいかに中学校への PR 活動に力を入れようが、そう簡単には下げられないのではないかと思います。そういう学生を少なからず抱えたまま高専では「技術者教育」を行わざるをえない。そういう意味では、入学時から問題を含みつつスタートせざるをえないのではないかと、そういう気がするわけです。

3 高専入学後の意識

3.1 入学後の高専生活に対する満足感

ともかくこのようにして学生は高専に入学してくるわけです。一体高専に入学してみてもどのように感じたか。一般的に、高専生は学校生活に不満を持つ者が多いといわれています。本校にお

ける昭和 58 年度の調査では高専生活に満足していると答えた者は全学年の 41.0 % でした。他の高専でも同様なようであり、昭和 55 年度に国専協厚生補導委員会で全国の 12 高専を対象に調査した結果では、「学校生活に満足ですか、それとも不満ですか」という項目に対して「満足」と回答した者は僅かに 36.8 % でした。学校生活に不満を持つ者が多いことは高専教育の 1 つの特徴であるという人さえいるようです。

ではどのような点で不満なのかを国専協の調査でみてみますと、8 つばかりの理由の中から選択されたものは、「授業で気に入らないのがある」52.9 %、「先生の指導が適切でない」45.1 %、「寮生活に問題がある」33.6 % などとなっています。

本校でも同様の感じでありまして、担任をやっておりますとこういう学生の不満はよく聞かされるわけです。さらにはアンケート調査の結果では、学生は不満を持つばかりではなく、高専に入学したこと自体を悔やむことさえあるというふうになっています。これも本校ばかりではないようであり、他高専 6 校ばかりの 5 年生に対する調査では「高専に入学したことを後悔したことがありますか」と聞くと、50.6 % の者は「後悔したことがある」と答えております。

本校の場合をもっと多くなりまして、昭和 58 年度の全校生に対する調査では、「後悔したことはない」という者は僅か 14.8 %。要するに本校入学生の 75 % は、高専に入学したことを後悔したことがあるということになります。また「現在も悔やんでいる」という者は 26.8 %。約 4 分の 1 です。学年別に見ると 3 年が 34.5 %、学科別に見ると電気工学科が 31.4 % の者が現在も悔やんでいると答えています。

表 4 高専入学を悔やんだことがあるか

悔やんだことはない 14.8 %	今は悔やんでいない 56.9 %	現在も悔やんでいる 26.8 %
---------------------	---------------------	---------------------

(昭和 58 年度全学年)

最近の学生についてはこのような調査はしていないので良く分かりませんが、感じとしてはこれ程ではないのではないかという気がしています。担任をしても、最近結構満足している者が多いのではないかという感じです。

本校への入学生は、ほぼ岩手県全域と宮城県北部から来ています。そして各中学校からはせいぜい 1 ~ 2 名しか来ないわけです。学生は他の大多数とは異なる道を選択することになるわけであり、考えようによっては 1 度は「あー、高校の方が良かったかなー」と思うのはやむをえないことなのかもしれません。しかしそういう思いはできれば一過性のものであって欲しいわけであり、入学していつまでも「来るのではなかった」という思いを引きづっていられては困るわけです。

それではどのような理由で学生は高専に入学したことを悔やむのでしょうか。悔やむ理由として考えられる項目を幾つか用意して学生に選択させると、最も多いのは「授業の内容や程度が自分にあっていない」と思ったことによるようです。26.2 % の者がこの理由を上げています。特に「現在も悔やんでいる」者についてみると、40.5 % の者がこの理由を上げています。つぎに多いのは「高専での学習目標が分からなくなった」で、20.5 % となっています。いずれにしても「自分にあっていない」「学習目標が分からない」など、高専において学習する上では最も本質的なところで悔やんでいるのではないかと思われます。

表5 入学を悔やんだ理由

入学を悔やむ理由	全体	成績			勉学意欲		
		上位	中位	下位	ある	あまり	ない
悔やんだことはない	14.8	20.9	14.6	11.2	25.4	9.3	6.8
授業の内容や程度が自分に合わない	26.2	17.1	23.6	37.6	19.1	30.4	31.1
高専での学習目標が分からなくなった	20.5	22.5	19.5	21.5	15.4	21.7	30.1
大学に進学したいと思った	16.6	17.8	17.2	15.1	12.4	18.3	22.3
寮での団体生活になじめなかった	16.2	15.5	15.6	16.6	14.2	18.9	10.7
(以下略)							

3項目以内の複数回答。該当項目の全回答者数に対する割合である。(昭和58年度全学年)

これを学年別や成績別に見てみますと、いろいろ特徴が見られます。1年生の場合は、やはり「寮での団体生活になじめなかった」ことを上げる者が多いようです。成績別では、成績上位の者は「高専での学習目標が分からなくなった」ことを上げているのに対して、成績下位の者では「授業の内容や程度が自分にあっていない」ことを大きな理由に上げています。これは要するに、授業が分からなくなったということなのだと思います。

また入学を悔やむことと高専での学習意欲のあるなしを見てみると、悔やんだことのない者の62.9%は高専での学習意欲があるとしていますが、現在も悔やんでいる者でそのような者は16.9%にしかすぎません。つまり現在も悔やんでいる者の8割以上は、高専での学習意欲は「無い」と答えていることとなります。高専に入学するのではなかったという思い

表6 高専における学習意欲

	ある	あまりない	全くない
全体	36.7	48.8	14.1
悔やんだことはない	62.9	30.6	6.5
今は悔やんでいない	39.6	49.5	10.4
現在も悔やんでいる	16.9	56.4	26.2

(昭和58年度全学年)

の中では、学習意欲がないのは当然のことかもしれません。

ではつぎに、せっかく高専に入学しながらそのことを悔やむのはどのような学生であるのかを、高専を志願したときの意識別に見てみたいと思います。先ほど約8割の学生は「いろいろ考えて自分から進んで」あるいは「人から勧められて意欲的に」入学しているということをお話しました。この入学意志の決定の仕方が入学を悔やむ事とどのように関わっているのかということをもまず見てみたいと思います。

そうしますと、高専に入学したことを「悔んだことはない」という者の79.6%は「いろいろ考えて自分から進んで」入学したとしているのに対して、高専に入学したことを「現在も悔やんでいる」者でそのようなものは42.1%です。また「悔やんだことはない」という者の58.3%は最も入学したかったのは「高専の現在の学科」であるとしています。「高専の他の学科」としている者

を合わせると、悔やんだことのない者の 77.7% は最も入学したかったのは「高専」であると答えたことになると思います。これに対して現在も悔やんでいる者ではどうかと言いますと、そのような者の 49.2% は、最も入学したかったのは「普通高校」であったと答えています。「工業高校」と答えた者を合わせると、67.7% は「高校」に入学したかったということになります。

表7 志望時の意識との関連性

	高専には誰の意志により入学したか			
	自分から進んで	意欲的に	何となく	合格したので
悔やんだことはない	79.6	11.1	4.6	3.7
今は悔やんでいない	56.3	18.4	13.0	12.1
現在も悔やんでいる	42.1	12.8	20.5	23.6

	最も入学したいと思った学校はどこか			
	現在の学科	他の学科	普通高校	工業高校
悔やんだことはない	58.3	19.4	11.1	9.3
今は悔やんでいない	34.3	16.9	30.9	17.9
現在も悔やんでいる	21.5	9.7	49.2	18.5

(昭和 58 年度全学年)

このように見てきますと、高専入学を悔やむ者はすでに入学前に問題のある者が多いといっても差し支えないのではないかと思います。同様のことは、学校生活に対する満足感についてもいえます。例えば高専生活に強い不満を感じる者の 63.9% は最も入学したかったのは高校であったと答えています。

3.2 入学後の学習に対する意識

学生は、ともかくこのような思いの中で高専での学習をしていくことになるわけです。そして我々としては、このように高専に入学したことを悔やんでいるような学生をかなり抱えたまま授業をしていかなければならない。そういうことにもなろうかと思えます。

こうした中で、学生は実際のところどの程度勉強しているのか。今度は昭和 59 年度の全校生に対する調査からみていきたいと思えます。まず「自分はわりと勉強している方だと思う」という項目に「そうである」と肯定的に回答した者は 13.7% でした。1 年でも 16.5% にしかすぎません。回答は、「全くそうではない」「あまりそうではない」「まあそうである。」「全くそうである」の 4 つの回答肢の中から選択させています。「どちらともいえない」という中間回答を設けていないので、学生には必ず YES か NO かの回答を求めていることになります。具体的な勉強時間を問いつけるものではなく、また「わりと」という余分な副詞がついていてあまり額面どうりには受け取れないとは思いますが、要するに「勉強していない」ということは確かなことなのだろうと思えます。

では彼らは、中学校のときはどうだったのでしょか。中学校では勉強したが、高専に入学してから勉強しなくなったのか、それとも中学校の頃からあまり勉強していないのか。昭和 58 年度の調査では、中学校での生活について「家に帰ってからよく勉強した」という項目に「はい」「ど

ちらともいえない」「いいえ」という3つの回答肢で答えさせると、「はい」と答えた者は12.4%、「いいえ」は53.7%でした。中学校の頃も家ではあまり勉強していなかったのではないかと思います。

またこの年度の調査で中学校での成績を5段階に分けて答えさせますと、「上位」43.0%、「中の上」40.8%となっておりまして、全体の8割以上は中学校では上から4割以内にあったと答えております。ということは、彼らは中学校ではあまり勉強しなくてもまずまずの成績を取っていたということにもなるかと思えます。

まあ家で勉強していないということは、このような調査をせずとも授業をしていればすでに分かっていることなわけですが、問題は「なぜ勉強しないのだろうか」ということなのだと思えます。家で勉強しないのは勉強する必要がないからなのか、それとも勉強する必要があるとは思いつつ実際には勉強しないでいるのか。

昭和59年度の調査で「家に帰ってから勉強する必要性はあまり感じない」という項目への回答をみると、この項目を「そうである」と肯定する者は43.4%でした。1年生はさすがに30.5%と少ないのですが、他の学年はいずれも40%以上の者がこの項目を肯定しています。4割近くの学生は、そもそも家に帰ってから勉強する必要性をあまり感じていないのではないかと思います。

表8 家に帰ってから勉強する必要性はあまり感じない

1年	2年	3年	4年	5年	全体
30.5	47.6	43.1	43.3	56.4	43.4

「全くそうである」+「まあそうである」(昭和59年度)

また学年が上がるにつれて、全般に勉強しようという気持ちが薄れていく傾向がみられます。例えば「興味をもって取り組める科目がある」という者は1年では74.5%、大部分が専門科目の4年では48.0%です。「成績が少しでも下がるとひどく気になる」のは、1年では65.0%、5年では24.8%です。学年が上がるほど、成績が下がってもあまり気にならなくなるようです。もう一つあげると「高専の授業は時間の無駄だと思う」のは、1年では17.2%であるのに対して、5年では48.8%にもなっています。

表9 学年が上がることによる変化

	1年	2年	3年	4年	5年
興味をもって取り組める科目がある	74.5	65.8	57.0	48.0	59.8
成績が少しでも下がると気になる	65.0	49.7	48.8	33.3	24.8
高専の授業は時間の無駄だと思う	17.2	32.2	34.1	37.0	48.8
卒業後は技術者としての道に進みたい	82.0	76.3	70.7	63.0	74.4
高専には専門的知識を得て入学した	80.9	74.2	65.0	66.9	70.1
理工系よりも文化系の方が向いている	24.2	25.9	30.1	37.0	34.2

「全くそうである」+「まあそうである」の割合 (昭和59年度全学年)

そしてこれと対応するかのように、「卒業後は技術者としての道に進みたい」という者が減少しているようです。1年では82.2%の者が「技術者としての道に進みたい」としていますが、4年

では 63.0 % にしかすぎません。そして高専への当初の入学目的も薄れてくるように思われ、「高専には専門的知識を得るために入学した」という者は 1 年では 80.9 %、4 年では 66.9 % です。逆に「自分は理工系よりも文化系の方が向いている」とする者は学年が上がるにつれ増加する傾向がみられ、1 年では 24.2 % であったものが 4 年では 37.0 % にまでなっています。

このようにみてきますと、学生はなぜ勉強しないのかということが、学生の将来への展望の持ち方と深く関わっているのではないかと思われるわけです。例えば、「卒業後は技術者としての道に進みたい」と思わない者の 50.0 % は、「高専の授業は時間の無駄だと思う」と答えています。また「自分は理工系よりも文化系の方が向いている」とする者の 44.8 % は、やはり「高専の授業は時間の無駄だと思う」と答えています。

このことは昭和 59 年度だけのことではないようでして、昭和 60 年度の入学生に対して 4 年間継続調査した結果でも同様の傾向がみられました。卒業後の技術者志向は学年が上がるにつれ減少し、また技術者志向を持ってないでいる者ほど勉学意欲も低い傾向にあります。

高専は 5 年間の一貫教育ということで、最初から一つの目的を持った教育が行われています。学生の大部分はその目的をわりと良く理解して入学してきているわけですが、入学後にその目的に添えないと感じたとき、学生はどうすればよいのでしょうか。学生が勉強しないのは学校としては大きな問題ではありますが、なぜ勉強しないのかということを考えていきますと、そこには何か学校としてはどうしようもないものが含まれているのではないかという気がしてならないわけです。

最後の諸問題で話すべきようなことを早々と話してしまいましたが、最後にもう一つ私として気になる結果をお話しておきたいと思います。

それは、学生は専門科目が増えても、その科目の学習目的をあまりよく分かっていないのではないかということです。「何のために勉強するのか学習目的のはっきりしない科目が多い」という項目への回答をみてみますと、この項目を肯定する者は学年が上がってもあまり変わらないわけです。どの学年も（専門科目がほとんどの高学年でさえ）6 割前後の者がこの項目を肯定しています。そしてそれは、成績の上下ややる気のあるなしにはよらないようなのであります。成績の良い者も、やる気のある者も、やはり 6 割前後の者が「学習目的のはっきりしない科目が多い」と回答しています。

表 10 何のために勉強するのか学習目的のはっきりしない科目が多い

	全体	成 績				学習面のやる気		
		上位	中上	中下	下位	4 未満	5~6	7 以上
全くそうである	20.5	20.9	18.1	20.3	21.2	30.5	12.1	19.1
まあそうである	39.3	38.8	37.7	42.5	38.8	35.0	44.8	37.7
あまりそうでない	34.4	33.6	38.7	33.3	32.7	29.6	37.5	36.2
全くそうではない	5.8	6.7	5.5	3.9	7.3	4.9	5.6	7.0

(昭和 59 年度全学年)

また授業をやっても、学生は「これは社会に出てから一体何の役に立つのだろうか」と、そういう疑問をつねに持つようです。昨年もある学科の成績上位の学生から、「微積は社会に出てか

らどんな役に立つのですか」と聞かれたことがあります。このことを種々考えた末、「微積は役に立たない」という結論に達した学生もいました。

高専は「実践的技術者の養成」ということで、卒業すると即戦力として産業社会に受け入れられているとよくPRされます。しかし学生は、実際の授業を受けながら「これは社会に出てから一体何の役に立つのだろうか」と感じているわけです。高専で勉強することがはたして学生が考えるような意味で「役に立つ」ものであるのかどうかは分かりませんが、学生がそれをかなり気にしているということは、我々が授業をする上でつねに気を付けておかなければならないことだろうとおもいます。

4 学業不振学生

これまでは学生の学習に対する意識ということで、全般的なことをお話してきました。つぎに演題にもある「学業不振学生」ということに話題を移したいと思います。

学業不振といってもいろいろあると思いますが、単純に「成績が悪い」あるいは「意欲がない」学生というように考えまして、そのような学生は一体どのような状況にあるのか、またどのような問題を抱えているのか、というようなことをお話してみたいと思います。

4.1 成績の良い学生と悪い学生

まず成績の悪い学生ということで、彼らを逆に成績の良い学生と比較しながら、成績の良い悪いによりどのような違いがあるかを考えていきたいと思います。ここではおもに、昭和60年度から昭和63年度にかけて継続調査した資料をもとにお話したいと思います。

最初に高専志望時の意識をみてみますと、幸いなことに成績による差は特にみられませんでした。高専に本当に入学したかったかどうかと、実際に高専入学後の成績とは特に関連はしていないようです。

では入学後の生活はどうかをみますと、前に加藤（治）先生や昆先生の調査で成績と欠席欠課とがかなり関連していることが指摘されましたが、今回の調査でも同じ結果になっています。欠席欠課は学年が上がるにつれ増加し、その中でも欠席欠課の多い者ほど成績が悪い傾向にあります。また各学年で成績上位の者はほとんど休まないのに対して、特に高学年では欠席欠課の大部分はその学年の成績下位の者で占められている感があります。

表 11 成績の上下による換算欠席等

	学年	上位	中上	中下	下位
換算欠 席日数	1年	1.16	0.80	3.72	6.03
	4年	0.92	3.69	8.03	25.3
クラブ 加入率	1年	81.4	79.5	80.0	76.3
	4年	66.7	43.6	31.4	22.9
技術者 志向%	1年	79.1	79.5	74.3	84.2
	4年	77.8	69.2	51.4	34.3

(昭和60年度入学生)

またクラブ活動への参加率の面でもかなりの差がみられました。1年ではあまり成績による差はみられないのですが、学年が上がるにつれ成績による違いが出てきて、高学年では成績の良い者ほどクラブ活動への参加率も高い傾向にあります。特に4年間を通して成績上位にあった者は、4年になっても6割以上がクラブ活動に参加しているのに対して、4年間を通して成績下位にあった者は、学年が上がるにつれクラブ活動への参加率も低下し、4年では27.3%程度の参加率でしかありません。

同様のことは「卒業後は技術者としての道に進みたい」という項目への回答にもみられました。この項目への回答は1・2年では成績による差はみられませんが、3・4年ではほぼ成績順になっておりまして、成績の良い者ほどこの項目を肯定する者が多い傾向にあります。4年で成績上位にある者では77.8%が技術者としての道に進みたいとしています。下位にある者では34.3%にしかすぎません。また4年間を通して成績上位にある者の技術者志向は学年が上がってもあまり変化しないのに対して、4年間を通して成績下位にあった者では学年が上がるにつれ技術者志向が減少していています。

まとめますと、成績の良い者ほど学校を休まずクラブ活動への参加率も高く技術者志向も強いものに対して、成績の悪い者ほどこの逆の傾向にあるということです。そしてその傾向は、学年が上がるほど顕著になってきています。それは、成績の良い者は学年を通じて技術者志向などがあまり変化しないのに対して、成績の悪い者は学年が上がるにつれそれらがますます悪い方向に変化していくことによるようです。良い者はあまり変わらず、悪い者がますます悪くなるということのようです。

ではこの成績下位の者はどのような思いで生活しているのでしょうか。4年間の継続調査では、毎年ほとんど同じアンケートで調査しました。それをもとに、学年が上がるにつれ特に変化の大きかった項目について紹介してみたいと思います。

4年間を通して成績が下位にあった者についてみると、その回答の仕方が学年が上がるにつれ大きく変化しているのは、「卒業後は技術者としての道に進みたい」あるいは「学校に行きたくないと思うことがある」などという項目への回答でした。成績上位の者は学年が上がってもその回答の仕方にあまり変化がみられないのに対して、成績下位の者は学年が上がるにつれ技術者志向が減少し、また学校に行きたくないと思う者が増えています。特に4年では51.5%の者が「学校に行きたくないと思うことがある」と答えています。また成績下位の者では、「勉強が難しくついていけない」という者も特に高学年で多くなっています。

表 12 成績の上下による意識の変化

	成績	1年	2年	3年	4年
卒業後は技術者としての道に進みたい	上位	81.9	69.8	75.8	78.8
	下位	78.8	72.8	51.5	45.5
学校に行きたくないと思うことがある	上位	24.2	33.3	30.3	36.4
	下位	27.2	24.2	42.4	51.5

「全くそうである」+「まあそうである」の割合
(昭和60年度入学生)

4.2 意欲のある学生と無い学生

つぎに同様のことを、勉強意欲のあるなしでみていきたいと思います。引用する資料は、同じく昭和 60 年度から継続調査したものです。

まず意欲のあるなしをどのようにして測るかということですが、アンケートへの回答の仕方から勉強しようという気持ちの強さのようなものを数値化致しまして、その数値の大小により勉強意欲のあるなしを判断することに致しました。その詳細についてはここでは省略させていただきます。

さてまず、このような勉強意欲のあるなしと高専志望時の意識との間に差があるかどうかということですが、成績の良し悪しとでは特に差はみられなかったのですが、意欲のあるなしとではかなりの関連性がみられました。高専に入学するにあたりいろいろなことを良く考えて、また高専に入学したいと強く念願して入学してきた者の勉強意欲はわりと高いのに対して、高専を志願する段階で自己の適性などをあまり考慮しないで入学してきた者の勉強意欲は、1年の段階からあまり芳しいものではありません。しかもそのような者の勉強意欲は、学年が上がるにつれさらに低下していく傾向がみられます。

表 13 志望時の意識と勉強意欲

	1年	2年	3年	4年
平均	20.6	20.5	20.2	19.8
意識良好	21.8	21.2	21.3	20.9
意識不良	19.7	20.4	19.2	18.4

(昭和 60 年度入学生)

では入学後の成績はどのようになっているのでしょうか。成績との関連性を調べてみると、勉強しようという気持ちの強さと成績の上下とはあまり関連していないのではないかと思われる結果が得られました。4年間を通して成績上位の者と4年間を通して成績下位の者との勉強意欲を比較してみますと、4年目でやや成績上位の者の勉強意欲が高くなっていますが、3年までは成績の上下による差はほとんどみられませんでした。

これはやや意外な感じがしますが、良く考えてみると成績が良くてもチャランポランな学生もいれば、真面目にやっているのに成績はあまり良くない者もいるわけです。また4年間を通してみたということは、成績下位にあっても少なくとも4年までは順調に進級できたということでもあるわけですし、そういう面で考えると良くやっているということにもなるかと思えます。

つぎに欠席欠課との関連性をみてみますと、あまり休まない者ほど勉強意欲も良い傾向がみられました。特に4年間を通してほとんど休まない者の勉強意欲は良い側に安定しているのに対して、4年間を通して欠席の多い者は学年が上がるにつれて勉強意欲も低下していく傾向がみられます。

クラブ活動への参加率についても同様の傾向がみられまして、4年間クラブ活動に参加していた者の勉強意欲は良い側に安定しているのに対して、2年以降クラブ活動に参加しなかった者の勉強意欲は学年が上がるにつれ低下していく傾向にあります。

これを卒業後の技術者志向についてみますと一層顕著になります。4年間技術者志向を持ち続けた者の勉強意欲はずっと良い側に安定しているのに対して、2年以降技術者志向を持たなくなっ

た者の勉学意欲は1年の段階から低く、しかもそれは学年が上がるにつれてますます低下していています。

表 14 学年進行による勉学意欲の変化

		1年	2年	3年	4年
成績	上位	20.6	20.4	20.3	20.3
	下位	20.5	20.2	20.1	19.0
換算 欠席	多群	20.7	20.5	19.2	18.4
	少群	21.6	21.6	21.3	21.3
クラ ブ	参加	21.7	22.0	21.7	21.1
	非参加	20.5	19.8	19.5	19.0
技術者 志向	志向	21.6	21.7	21.2	21.2
	非志向	19.3	18.2	17.3	16.8

(昭和60年度入学生)

このようにみてきますと、高専入学後の勉学意欲はそもそも高専を志望する段階で問題がありそうです。そして「卒業後は技術者としての道に進みたい」と思えるかどうかともかなり関連しているように思われます。実際、4年間を通して勉学意欲の高かった者は、4年になっても75.7%が「卒業後は技術者としての道に進みたい」と答えているのに対して、4年間を通して勉学意欲の低い者の技術者志向は1年の段階から低く(59.4%でしかありません)、しかもそれは学年が上がるにつれますます低下しています。途中の学年で技術者志向を持てなくなった場合は、それ以降の学年の勉学意欲が前の学年と比べてかなり低下しています。

表 15 勉学意欲の良不良による意識の学年変化

		勉学	1年	2年	3年	4年
この学校には親しみ の持てる先生が多い	良好	35.1	32.4	21.6	27.0	
	不良	28.1	9.4	6.3	9.4	
少しでも成績が下が るとひどく気になる	良好	51.4	32.4	37.8	51.4	
	不良	31.3	21.9	12.5	12.5	

「全くそうである」+「まあそうである」の割合

(昭和60年度入学生)

ではこのような勉学意欲の低い学生はどのような思いで日々の学校生活を送っているのでしょうか。4年間の回答の仕方では差の大きかった項目をあげると、「この学校には親しみの持てる先生が多い」あるいは「成績が下がってもあまり気にならない」などという項目への回答でした。勉学意欲の低い者で2年以降「親しみの持てる先生」がいるのは、1割にもなっていません。意欲がないため先生方から注意ばかりされてこういう結果になっているのかもしれませんが。また4年

間を通して意欲が低い者は、学年が上がるにつれ成績が下がってもあまり気にならなくなるようです。意欲のある者は4年でも51.4%の者が「成績が下がると気になる」としているのに対して、意欲の低い者では12.5%でしかありません。このような者にとっては、もはや成績が上がろうが下がろうが関係ないのではないかと思います。

5 教育指導上の諸問題

5.1 志望時に問題のある学生

ではこのように成績が悪かったり、あるいは意欲の低い状態にある者に対してどのような指導をすれば良いのか。これこそ学校として大きな問題なわけです。

まず高専における勉学意欲の低い者のかなりの者は、志望時の意識など高専入学前のことに問題のある者が多いということでしたので、入学直後の1年生に対するガイダンスが大変重要になるのではないかと思います。一体学生はどのような思いで高専に入学してきたのか。問題を持ちつつ入学してきた者の場合は、早めはその気持ちを転換させて前向きな高専生活を送れるよう導いてやる必要があると思います。

とはいってもそれにも限度があるわけです。1年生の場合はまだ進路変更という最後の手段がありますが、2年生になってから高専に合わないと思ってもやめるにやめられない。高校へ転校するといってもカリキュラムの関係でそう簡単ではないし、もう一度高校を受験し直すといっても、それでは2年も遅れることになります。

一体こういう学生をどうすれば良いのか。そう言われましても、何とも答えようがないわけです。結局は何とか担任がだましまし3年まで進級させてやるしかないのではないかと。「だます」という表現はちょっと誤解を招くかもしれませんが、実際にはこれも問題があるわけですし、「あの学生まで進級できたのか」ということになりますと他の一般学生に悪影響を与えることにもなるわけです。かと言って進級判定を厳しくしすぎると、今度は中学校に対する悪影響が懸念されるわけです。もう一度、ではどうすればよいのか。結局は「難しい問題である」という結論を得て安心するしかないのではないかと思います。

5.2 意欲のない学生

しかし、こういう結論を得ても何ともならないわけですし、ともかく何とかしなければならぬ。一体こういう意欲のない学生に対してどうすれば良いのか。今度は昭和59年度の調査で見たいと思います。

この年度は「高専における学習面のやる気」ということで、それを0～10の間の数値で答えさせ、その数値とさまざまな項目との関連性を調べてみました。そしてそれをもとにどの様なときにやる気が起きるのかを調べていきますと、やる気の数値の低い者に対しては何らかの対策を講じて、あまり効果は期待できないのではないかと考えざるを得ませんでした。その対策は単にやる気のある者のやる気を一層高めるだけであって、やる気のない者のやる気はあまり大きくは変わらないのではないかとと思われるわけです。

同様のことは「卒業後は技術者としての道に進みたい」と思えない者に対しても当てはまります。将来の技術者志向を持たなくなった者に対しては、さまざまな工夫を施してもあまり効果は期待できないのではないかとと思われるわけです。

表 16 どのようなときやる気がおきるか

	やる気	おきない	少し	かなり	非常に
学習内容に興味 がもてたとき	3 以下 7 以上	17.1 4.0	34.3 18.5	31.3 41.5	17.2 36.0
先生の説明が よく分かるとき	3 以下 7 以上	17.1 6.0	38.8 34.2	35.8 37.2	8.2 23.6

(昭和 59 年度全学年)

ではこのやる気と最も関連性のある項目は何かということ調べてみますと、「興味をもって取り組める科目がある」かどうか、そして「現在の学科の内容が自分の適性に合う」と思えるかどうかでした。実際「興味をもって取り組める科目がある」と思えなくなったとき、その結果として「現在の学科は自分の適性に合わない」と思うようになることは十分に考えられます。「卒業後は技術者としての道に進みたい」とも思えなくなるのではないのでしょうか。そしてそれは「実践的技術者の養成」という特定の目的を持った高専においては、極めて致命的のことになるのではないかと思われるわけです。彼らにとって高専での学習は、もはや時間の無駄としか思えなくなるのではないのでしょうか。

表 17 やる気との関連性

		やる気		
		4 以下	5 ~ 6	7 以上
興味をもって取り 組める科目がある	そうである そうでない	22.9 53.2	36.0 34.0	41.1 12.8
現在の学科は自分 の適性に合っている	そうである そうでない	21.3 46.7	36.7 34.4	42.0 18.9

(昭和 59 年度全学年)

このように見てきますと、そのような学生に対して改めて「ではどうすれば良いのか」と言いたくなるわけですが、これもそう簡単な方策があるとは思えません。ただ何か考えられるとすれば、1年における「やる気」は高いということがせめてもの救いではないかということです。今述べたようなことから、やる気が高い者に対しては何らかの効果が期待できるのではないかと考えられます。どのみち学年が上がるにつれてやる気が減少していくわけですから、それならばやる気のある1年のやる気をできるだけ高めておくのも一つの方法ではないかと思えます。

また高専においては、このようなやる気の低い学生の存在をあらかじめ仮定して授業をしなければならぬのではないかという気も致します。そのような中では、やる気のある学生のやる気を高める工夫をする中で、やる気の低い学生のやる気も幾分なりとも高まることを期待するしかないのではないのでしょうか。

5.3 勉強をしない学生

では、学生に勉強させるには具体的にどうすれば良いのかということが、つぎに問題になろうかと思えます。学生はなぜ勉強しないのか。

先にお話しましたように、学生はそもそも勉強の必要性をあまり感じていないのではないかと思われるわけです。実際我々としても、学生が勉強しないのは分かっているため、授業も予習を前提としない授業となってしまうがちです。勉強してこなくとも授業が分かる。ますます勉強する必要性は感じない。試験のときも学生に点をとらせるための問題となりがちで、学生とすれば前日ちょっと勉強するだけで何とかそれなりの点数がとれる。また学年が上がるにつれ、かなりの者が技術者志向を持てなくなっているということもあるわけです。このような状況にある者にとって、一体どこに勉強する必要性が感じられるのでしょうか。

かと言って予習を前提とする授業をしようものなら、落伍者が続出するのが目に見えています。学生は、分からなくなると授業に興味もてなくなり騒ぐようになります。それでは授業がなりたたなくなる。また、ちょっと勉強しただけでは点のとれない問題を出しても同様の結果が予想されます。赤点が続出します。そのまま正直な評価をすると、今度は原級留置者が続出します。

一旦そのような荒療治をすれば、あるいは学生は危機感を感じて勉強するようになるのかもしれませんが。しかしなかなかそのようなことは学校としてはでき難い。赤点が続出したときは逆に教官側がその後始末のために苦勞することになるので、結局はそのような面倒なことにならないよう、学生のレベルに合わせた問題、つまりはちょっと勉強すれば点のとれる問題を作ってしまう。そういう悪循環になっているのではないかと思えます。

ではどうすれば良いのかということで、結局はまた振出しに戻ってしまうわけです。

しかしこのように難しく考えなければ、学生を勉強させるのは簡単だろうと思えます。毎時間課題を出して、つぎの時間にはそれを添削したものを返す。そういうことを繰り返して、しかもそれを学年末の評価に反映させる。そういうふうな授業をすれば、おそらく学生は良く勉強するだろうと思えます。前に教官研究集会に出たとき、どこかの高専の先生が4年の応用数学でこのような方法で授業を行ったところ、学生の勉学意欲が高まったようだというような報告をしていました。話をきいていると、その先生は空き時間はすべてそのレポートの添削のためにつぎ込んだような感じでした。それだけの苦勞をすれば効果があって当然ではないかという気がします。

高専教官としては、実際のところなかなかそこまではできないだろうと。いかに教官が手をかけずに学生に勉強させるか。我々はそのような方法を探しているのではないのでしょうか。恐らくそのような良いことづくめの方法はないのだろうと思えます。学生を勉強させようと思うのなら、その分我々も手をかけなければならないのではないのでしょうか。

しかし現実には、手をかけようと思ってもなかなかそのような時間が取れなくなっているのではないかという気がします。授業の準備や課題の作成、その添削、あるいは個々の学生に対する補習。いずれも授業の合間や放課後の空き時間が重要です。その時間はまた、会議の時間としても重要なわけです。学生委員会や寮務委員会、あるいは担任としての種々の生活指導の時間としても重要です。それはまたクラブ活動の時間帯でもあります。むろん教官個人の研究時間としても重要なわけです。1日24時間、それこそ睡眠時間を削るくらいのことをしなければ、全てをこなすことは無理ではないのかという気がします。

そのときどれを削るかとなると、会議をそうさぼるわけにもいかない。各委員会の仕事も分担

が割り当てられていてやらざるをえない。担任をしていると、問題のある学生をほっておくわけにもいかない。また課題の添削をやって学生の意欲を高めれても、そのために研究時間を削ったのではその先生自身にとっては何にもならない。しかし授業だけは、単に教室に行ってやってさえいけば良いわけです。学生が分かろうが分かるまいが、試験をしてそれなりの評価をだしてさえいけばそれですむわけです。

少し誇張しすぎているとは思いますが、また何も授業で手を抜いているとかいうようなことを言っているわけでもありませんが、好むと好まざるに関わらず結果としてこのようになってしまっているのではないかと思います。要するに、学生に勉強させようとしても、学生に手をかける時間がなかなか取れなくなっているのではないかということです。

ではどうすれば良いのか。やはりここでも「難しい問題である」という結論を得るしかないのではないのでしょうか。

6 おわりに

1時間くらいなら何とか話せるかなと思って引き受けたわけですが、思ったより時間が経ってしまいました。アンケート調査をもとにしているのです、あるいは実際に学生に接触されたときの感触とは違う場合があるかもしれません。また、他の先生との個人的な話合いの中で出てきたことを取り上げたところもあります。「それは私の言ったことではないか」と言われると、全くその通りですと答えるしかありません。「厚生補導研究会」という公の場で問題提起をさせて頂いたということで、その点はお許し頂きたいと思います。

少し問題を大きくしすぎってしまったかもしれませんが、以上をもちまして「教育指導上の諸問題」の問題提起とさせて頂きたいと思います。厚生補導との関連性については、どうかこれから協議討論をお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。

参考文献

- [1] 島美・昆謙造・加藤治雄・梅野善雄：工業高等専門学校における欠席・欠課の現状と原因調査(3)，昭和57年度高等専門学校教育方法等改善経費報告書，一関工業高等専門学校，53-76頁，昭和58年3月
- [2] 島美・梅野善雄：工業高等専門学校学生の意欲を高める教育方法の研究(I)－高専入学を悔ませる要因について－，昭和58年度高等専門学校教育方法等改善経費報告書，一関工業高等専門学校，1-111頁，昭和59年3月
- [3] 島美・梅野善雄：工業高等専門学校学生の意欲を高める教育方法の研究(II)－高専生のやる気の諸相－，昭和59年度高等専門学校教育方法等改善経費報告書，一関工業高等専門学校，1-72頁，昭和60年3月
- [4] 梅野善雄：高専入学後の技術者志向と勉学意欲，一関工業高等専門学校，1-68頁，平成3年3月（平成3年度文部省高等専門学校振興充実促進経費の補助を得て出版）